p3-軍曹の受難
p5-絵
p6-触手の乳母エルフ様
p8-絵
p9-軍曹の受難・後編
p12-ママンと赤ちゃん達

「おい、軍曹どのは発情期か。ちょっとばかり慰めてやるべきかぁ？」

「よせ。国際法規で捕虜への暴力行為はご法度だ。……捕虜自身がそれを望まん限りはな。」

「んあ？なんだその指環？」

「〝ヒト操作〟の符呪品だ。符呪の練習台として作成した。試しにこれを嵌めてかの女に何か命じてみたらどうだ」

「へー、面白れぇもん作ったな。そーだな…んじゃ〝軍曹！軍服を開いてオッパイ晒せ〟」

「ああっ!?」

――――私は己の意志でなく己の手で、着用していた軍服を開き、乳房を、テロリストたちの面前に晒した。

この紛争地で我々の部隊は奴らの奇襲に遭い捕虜として収容された。解放の条件として奴らは帝国に対し20億ウォルデンとアダマンチンを要求した。

一応として最低限の人権のある捕虜生活を送る中、私は不運にも発情期をもよおした。

すべての女性のエルフ種に十年に一度必ず訪れる発情期――これにかかれば、たとえ如何に徳を積もうが禁欲的であろうが全ての女は性衝動を抑えられず単純な術式すらも使用できぬほど思考が停止する。

私は軍人として、それが始まる前に己の脳に感覚麻痺の術式をかけ欲求を消しながら隊員たちをしごいてきた。

だが我々はここで、全ての術式の発動を抑制する強力な府呪枷を装着させられ、僅かな発光の術式すらも使用できなくなっていた。

……当然ながら感覚麻痺など使えようがなかった。

あれよあれよという間に、私は己の手で己の股を下品に開き、奴らを受け入れる体勢をとっていた。

「お～、怖い顔をしながら下のお口はダラダラ涎を流してらっしゃいますなあ軍曹どの！」

「よ、よせ……触るな、よせ…あっ!!」

オークの遠慮のない太ましく骨ばった指が私の秘所にずるずると入り込む。

「へ、へっ。嫌そうな顔すんなよ。俺様の極太チンポを受け入れる準備をさせていただいてんスよ！」

「…貴様強姦する気かっ…今すぐその手を出せ、やめろ、やめ、……あっ！」

不快感と嫌悪感で気が狂いそうな私をよそに、部神経な指は膣内を無礼講にかきまわしGスポットを執拗に刺激し、私の肉体を否応なしに昂らせ、出したくもないような声を出させた。

「そろそろほぐれてきたな。
ほら見ろよ、これから強えー女を
好きにできるせいで俺のチンポぎんぎんだぜ」
「ひっ…!!」
そこにあるのは男の腕ほどの
太さを持つオークのそそり立つ男根だった。
「強姦だなんだ言うけどナァ、俺の前で
物欲しそうにお股開いている下品な軍曹が悪いんだぜ。
観念して現実を受け入れな……っとぉ!!」

「あがぁぁぁぁぁぁぁっ!!!!!!」

容赦なくそれが私の膣をこじ開け侵入を始めた途端
わずかに骨盤が歪む感覚を覚えた。
「くっそ、さすがにオーク女に比べて
ハイエルフのまんこは小っせえなぁ!
おら、死ぬんじゃねえぞっ…ってあんたも
そんなヤワでもねえか!!」
「ひっ、いぎっ、あ、かっ……!!」
「これから俺たちをいくらでも受け入れられ
るようなガバマンにしてやるからよ、安心しなっ!!」
奴は笑いながら、容赦なく私の膣を己の射精のための
道具を使うよう抜き差しを始めた。

そこにあるのは男女の営みではない。
肉が無理やりスられる感覚しかない、
ただの拷問のような苦痛だった。
激しいピストンの果てに、
奴の大量の精液が私の膣内に放たれた……。
「う、ぅぐ…ぁ…あ…っ……」
「はぁっ…はぁ…っ…あー…
処女みてぇなマンコだったわ…最高…
俺もオークとはいえエルフの端くれだからよぉ、
孕んじまったらわりぃな」
「……」
感覚麻痺の術式には欠陥があり、
度重なる使用により生殖機能を失う。
それゆえ発情期のたびに数十回とこれを
かけてきた私の子宮も卵巣も…
もう完全に使い物にならなくなって
いるはずだ。
—だが、もう何も考えたくなかった。

「(終われ…終われ終われ終われ終われ
さっさと終われぇっ…!!!)」
私は心の中で呪詛のように呟く。
「うお、まんこキツすぎてちんぽ
持ってかれちまう…おらっ射すぞぉっ!!!」
「ぅあ、ああっ…!!」

「この期に及んで涙の一滴も出さねぇたぁ
大したタマだな。さすが歴戦の軍人だ。
調教しがいがあるってモンだぜ」
「おい、終わったんなら次は俺にやらせろよ」
「いや俺様だ!」
「キツマンじゃなくなるうちになぁ!ガハハ」
奴らの下卑た笑いが遠くなっていく。

skebのご依頼絵。
獣人の女王が人身売買にかけられている様子です。

skebのご依頼絵。
サキュバスのお姉さんでした。

ポストカードのよし子。

06
数百年前、触手に乳腺をいじられたことで発情期に母乳を分泌してしまう体質になってしまったエルフ様。
「はぁ…今日もおっぱいの中がぱんぱんだわ。あの子たちにミルクあげなくちゃ」
かの女は夫が国外出張でいない中、森で見つけた育児放棄された触手の赤ちゃん達を持ち帰り育てることで、その寂しさを紛らわせていたのでした。
そんな中おとすれてしまった発情期…。
普段はペット用のごはんをあげていたかの女でしたが、エルフ種の体液は他生物にとってとても栄養価のあるものでもあるため、それをあげようと決めました。
「あんんっ… あっ そんな吸い方しちゃだめっ…」
お腹を空かせた赤ちゃん達はママの乳頭にむしゃぶりつき、一匹はおま○こに潜り込みごくごくとミルクと愛液を飲み始めます。
発情期のたび様々な生物に母乳を求められ続けたことで、かの女の乳頭はとても敏感。
この授乳行為はかの女にとってたいへん気持ちよく、また母乳分泌をさらに促すうえ赤ちゃん達も元気に育つのでまさに一石二鳥というわけでした。
授乳を終えたかの女のおっぱいは、またいつものサイズに戻ったのでした…。

夜も赤ちゃん達はママにべったりです。

エルフ様がベッドの上で眠っていると、かごの中から抜け出した触手たちは睡眠中のママの寝間着にもぞもぞと潜り込み、またちゅうちゅうとおっぱいと愛液を求め始めます。

「んっ…♥んっ…♥」

一匹は力の抜けているママの秘所に元気よく入り込み、膣内で元気よく子宮周りのポルチオを刺激しながら愛液の分泌を促します。

「だ、め、あんんっ…♥おま〇こ…♥♥奥ばかりっ…♥きもちよくしないでぇっ…♥♥」

眠っていても気持ちが良いのでしょうか、とても感じてしまうエルフ様。かの女はこれを夢の中でのできごとと勘違いしているのでしょうか、起きている間と同様に悩ましい声がたっぷりと漏れ出ます。きっと夢の中でも気持ちの良い夢を見ているのでしょう。

「あああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁんんんっっ……♥♥♥」

やがて快楽の頂点に達すると腰をあらん限りのけ反らせ、まるで出産するかのように膣圧で赤ちゃんをひり出してしまうのでした。

赤ん坊たちもそんなママのおま〇こにめげずに、またずるずると入り込み愛液を補給し続けるのでした……。

数百年前、触手に乳腺をいじられたことで発情期に母乳を分泌してしまう体質になってしまったエルフ様。
「はぁ…今日もおっぱいの中がぱんぱんだわ。あの子たちにミルクあげなくちゃ」
かの女は夫が国外出張でいない中、森で見つけた育児放棄された触手の赤ちゃん達を持ち帰り育てることで、その寂しさを紛らわせていたのでした。
そんな中おとずれてしまった発情期…。
普段はペット用のごはんをあげていたかの女でしたが、エルフ種の体液は他生物にとってとても栄養価のあるものでもあるため、それをあげようと決めました。
06
夜も赤ちゃん達はママにべったりです。
エルフ様がベッドの上で眠っていると、かこの中から抜け出した触手たちは睡眠中のママの寝間着にもぞもぞと潜り込み、またちゅうちゅうとおっぱいと愛液を求め始めます。
「んっ…♥んっ…♥」
一匹は力の抜けているママの秘所に元気よく入り込み、膣内で元気よく子宮周りのポルチオを刺激しながら愛液の分泌を促します。
「だめ、あんんっ…♥おま〇こ…♥♥奥ばかりっ…♥きもちよくしないでぇっ…♥」
眠っていても気持ちが良いのでしょうか、とても感じてしまうエルフ様。かの女はこれを夢の中でのできごとと勘違いしているのでしょうか、起きている間と同様に悩ましい声がたっぷりと漏れ出ます。
きっと夢の中でも気持ちの良い夢を見ているのでしょう。
「あんんっ…　あっ　そんな吸い方しちゃだめっ…」
お腹を空かせた赤ちゃん達はママの乳頭にむしゃぶりつき、一匹はおま〇こに潜り込みごくごくとミルクと愛液を飲み始めます。
発情期のたび様々な生物に母乳を求められ続けたことで、かの女の乳頭はとても敏感。
この授乳行為はかの女にとってたいへん気持ちよく、また母乳分泌さらに促すうえ赤ちゃん達も元気に育つのでまさに一石二鳥というわけでした。
授乳を終えたかの女のおっぱいは、またいつものサイズに戻ったのでした…。
「あああああぁぁぁあああぁぁぁあああああんんんっっっ……♥♥♥」
やがて快楽の頂点に達すると腰をあらん限りのけ反らせ、まるで出産するかのように圧迫で赤ちゃんをひり出してしまうのでした。
赤ん坊たちもそんなママのおま〇こにめげずにまたずるずると入り込み愛液を補給し続けるのでした……。

skebのご依頼絵。
ハイエルフの淑女とゴブリンちゃんが
入れ替わる内容でした。
いっぱいインスピレーションもらいました。

NTRというかBSS的な
「切り忘れたビデオ通話画面に映るもの」

skebのご依頼絵。
気のいい赤髪のグラマーな
騎士のお姉さんです。

skebのご依頼絵。
容姿端麗・才色兼備のオリキャラさんが
捕まってぐぬぬ、という感じです。
けっこう気合入れて描きました。

――捕虜になり、奴らに狼藉を働かれてから
どれほどの日数が経っただろうか。
わからない。頭が朦朧とする。

私は毎日のように膣と肛門と…全身に
アルラウネを投与されていた。
エルフ種の体は一度体内に入った
この世のあらゆる毒物を分解してしまう。
だが、唯一分解できない
ものがある。
ギヴル酒と…
このアルラウネだ。

――これは断じて私の意思ではない。
あのヒト操作の指環によって、
毎日のように私の肉体は操られ
私は奴らのオモチャにされているのだ。
アルラウネの液体には催淫効果がある。
肌に浸透することで一時的とはいえ
そこが性感帯へと変わり果てる。
原液をそのまま使用することは、
ひきつけや痙攣を誘発する恐れが
あるため、元来は希釈して使用されるものだ。

そして…私は敵の男根の上に乗り
奴らの射精を促すために
不本意に腰を振っていた。
「んんっ、はあっ…はぁっ…はぁああ
っっ…く…はっ…はあっ…!」

「いい腰使いするようになられた
じゃねえか軍曹っ…
今のあんたはまるで男を秒で
射精させるためだけの
セックスボットだぜ」
「はぁっ…うるさい…!!黙って無駄打ち
させられてろ、このウスノロがっ……!!」

その原液を毎日のように、この発情期の
肉体に投与された。
…私の体は骨の髄まで薬漬け状態に
させられていたのだ。
数え切れぬほど犯され、私の脳がますます
奴らに対する嫌悪感を増大す一方で
私の肉体はどんどん快楽を求めるようになり
奴らに男根を差し出されればまるで性欲を
解消するようにまたがる。

いやだ。こんな下卑た女は私じゃない。
だがだめだ。私がここで拒絶したとすれば……
正規の軍人でない奴らが隊員たちを五体満足で
帰国させられる保証など、どこにもないのだ――。

「おごッッッ!!!!!」
私を犯すオークが子宮をこじ開けん
ばかりに下から私を突き上げた。
私はそこで意識を失った。

「あっははは、お前が余計なことすっから
お陀仏しちまったじゃねえか。
とっとと叩き起こせよな～」
「どこまでダメになるかなァ。瓶に残ってる
アルラウネ全部垂らしちまえ」

私の心身が唯一休まるのはいつも夜間だった。
これほどまでに私の両隣に信頼できる隊員たちがいる安心感を得たことはない。

ギィッ…

物音に目を覚ますと、私をいつも犯すオークの一人が鍵を開けてそろりと侵入してきた。

「なんっ…!?おまえ…っ」

「シィッ。声出せば隊員たちが起きるぜ。いいのか?」

奴は私をうつ伏せにし、下半身を剥いた。

「へっへ。やっぱ引き締まったいい尻と尻穴だな。可愛い部下たちがいる場所でヤるってんのも興奮するだろ?」

「よ、よせ…今は…頼むからよせ…!!」

「せいぜい声出さねえように気張るこったな」

「いぎっ…!!!」

「ほらほらエッチなクソ穴に入ってく入ってく…くぅっ…たまんねぇっ…!!」

「お、あ、あっ…!!」

「ぅおお、ミッチり入っちまったぜぇっ……ふんっ!」

「んぉほおおおおおおおッッッ…」

ずるりとそれが引き抜かれたと同時に排便する以上の快感が押し寄せ私は軽く達した。

それから奴は完全に開発され果て爛れた尻穴に緩急をつけて抜き差しし、いつ私が大声で嬌声をあげるのか反応を楽しんだ。

「さすが軍曹殿、いくらアルラウネ漬けにされたところで隊員に恥を晒すような真似は死んでもやらねえってか」

「ふぅっ、う、うぐっ…ひっ…ん"ん"っ……!!」

「(頼む、誰も気づかないでくれ…っ…これが知れたら私は兵士たちにどう顔向けすればっ…!!)」

私は…私の身体は一体この先どうなってしまうんだ?

気が狂いそうな尻穴の快感に悶えながら私は血が滴るほど歯を食いしばり、長い長い夜を耐えた…。

…私はこの時、すでに奴らの腕の太さほどの男根をすんなり受け入れるほどに尻の調教も受けていたのだ。

あれから十数日――。
すっかりかの女の背丈よりも巨大になり果てた赤ちゃん達。
エルフ種の体液は他生物に豊富な栄養を与えるいっぽうで、
摂取し続けるとその生物を急成長させてしまう
ドーピングのような効果を発揮してしまう側面があります。

成長することでママの肉体を様々な手法で
気持ちよくさせることを覚えた彼らは、細長い触手を
かの女の乳頭から乳管に潜り込ませ
やがて乳腺に到達させてさらなる母乳分泌を
毎日促し続けました。

気付くとかの女のおっぱいは頭3▪4つ分程度にも肥大し、
より栄養価の高いミルクをたっぷりと分泌し温存できる
乳房に変化していました。

日を追うごとにどんどん巨大化する赤ちゃん達は
エルフ様夫婦の寝室を所狭しと陣取り、
四六時中母子ともにゆったりと愛し合ったのでした……。

かの女の発情期が終わるころには3匹はすっかり
立派な大人になり、ママに見送られながら
元気よく森へと帰っていったのでしたとさ。
おしまい。

…その後、子ども達の粘液でねちょねちょに
なってしまった部屋を掃除しているところを
帰国した夫に知られ、呆れられたのはまた別の話…。

Flieger 14August 2022
http://whitecross.sakura.ne.jp/
eririn810@gmail.com

◆当書籍の高校生を含む未成年の購読及び譲渡を禁ず。
◆当書籍本文のインターネット等へのアップロードを禁ず。
当方は2015年及び16年の違法アップロード事件において
担当弁護士と兵庫県警に相談し告訴状を提出し、
その後の犯罪行為においても厳格な措置を講じております。
ご理解をお願い申し上げます。

◆The uploading of all of this book to the
Internet and other media is prohibited.
I've consulted with the lawyer in charge
and the Hyogo Prefectural Police in the
cases of illegal sharing in 2015 and 2016,
and have filed a complaint,
and I'm taking strict measures in subsequent
criminal acts.

I appreciate your understanding.